

骨粗鬆症を見逃さずに 地域で治療継続へ

松岡医院 院長 松浦 良光 氏



高齢患者の骨密度を積極的に測定し、隠れた骨粗鬆症の拾い上げに努めているという松岡医院（和歌山県橋本市）院長の松浦良光氏。患者の治療継続率を向上させるため、和歌山県立医科大学附属病院紀北分院との連携に取り組み始めた。歯科医も巻き込んだ幅広い地域連携システムの構築を目指している。

私の専門領域は整形外科ですが、医院では内科も標榜しています。そのため、高血圧や糖尿病などの生活習慣病の患者さんが多く、骨粗鬆症を主訴とする患者さんは全体的には少ないです。ただ、当地域は高齢化率が高いため、高齢の生活習慣病の患者さんの中には、かなりの割合で骨粗鬆症が隠れている可能性があると考えています。

5年ほど前、腰痛の訴えがある生活習慣病の高齢患者さんの骨密度を測定したところ、かなり低下していたことがありました。以来、高齢患者さんの骨密度を積極的に測定し、骨粗鬆症を見逃さないように努めています。とはいえ骨粗鬆症は自覚症状が乏しいため、圧迫骨折などで痛みがある場合を除き、治療を開始してもその継続が難しいことが課題になります。

地域連携による 骨粗鬆症診療を目指す

高血圧や糖尿病の治療継続率はもともと高いため、それらの治療と一緒に行えば、骨粗鬆症の治療もあまり問題なく継続していただけます。ただ、骨粗鬆症単独ではドロップアウト（治療からの脱落）が多いため、治療継続率を上げることを目的に、紀北地域では和歌山県立医大附属病院紀北分院との「骨粗鬆症地域連携」の構築に取り組み始めました。ビスホスホネート製剤な

どの長期使用による顎骨壊死予防の観点から、この連携に歯科医を巻き込むことも想定しています。

当地域では、要介護率が非常に高いことも問題になっています。要介護の原因としては脳梗塞や認知症が広く知られていますが、骨粗鬆症に起因する転倒・骨折もリスクとなることはあまり認識されていません。骨粗鬆症の正しい知識の啓発が重要です。

地域の医師が骨粗鬆症の疑い患者を拾い上げ、病院で精査後に適切な薬物療法を導入し、地域の医師が再びフォローアップしていくという地域連携の流れは止めてはいけなく考えています。

注射製剤では習慣付けが大切

幸いにも、骨粗鬆症の薬物療法は大きく進歩しています。私は、重症の骨粗鬆症患者さんにはテリパラチド週1

回投与製剤を勧めることが多いのですが、注射薬に抵抗のある患者さんには「嫌になったらいつでもやめていいので、取りあえず始めてみませんか」と、軽い調子で提案するようにしています。そうすることで、患者さんにも「まずはやってみよう」と思ってもらえるように感じます。

なお、週1回投与製剤の注射を始めてすぐの患者さんでは、たまに「帰宅後にだるくなった」と話す患者さんがいらっしゃいます。そのようなときは、患者さんと話をし、治療を継続するかどうかを決めています。週1回受診して注射するという習慣付けができれば、続けていただける患者さんが多い印象を持っています。

今後、地域連携の仕組みが確立できれば、地域の骨粗鬆症患者さんの治療率や治療継続率は向上するはずです。その実現に向けて、地区医師会としても努力していきたいと考えています。

松岡医院

〒649-7205
和歌山県橋本市高野口町名倉186-1

